日米における自己主張とコミュニケーションの捉え方の相違

経済学部講師　角　田　真紀子

昨今、日本では、国際社会のもと自己主張やコミュニケーション能力の育成が重視されている。実際、多くの学生がこのことを気にしており、授業でグループワークなどをさせると「私は人見知りです」「自分はコミュ障です」と言うことがある。日本人の自己主張やコミュニケーションの仕方が他の国と比べて特徴的であるのは周知の事実だが、私は在外研究で1年間NYに滞在し確かにアメリカ人の仕方とは異なっていると感じたので、ここではその違いについて述べたい。

日本人には、もともとコミュニケーションの前提として「察する」「察してもらえる」という暗黙の了解があり、それが重視されてきたし、和を乱さないように相手の意図や気持ちを先に汲み取ろうとしてきた文化がある。アメリカ人は違う。民族や人種だけではなく、宗教、性別、家族構成などあらゆるものが多種多様なアメリカは、「アメリカ人」とひとくくりにしても一人ひとりがまったく違った文化や社会的背景を持っているため、「言わなくても分かってもらえる」という前提は成り立たず、自分の主張を伝えて自分の領分や権利や主義などを自己責任で保障することが必要である。

例えば感情表現も、アメリカ人にとっては自分がどう感じたかを表現することが第一であり、それを聞いて他者がどう感じるかということは二の次か、ほとんど関係ない。もし他者がそれを受けて何か感じたのであればその他者が次にそれを表現すれば良く、自己主張し合うことでコミュニケーションを図る。一方、日本人は、自分の感情が相手にどう受け取られるかということを推測するのが最初で、それを考慮しながら自分の感情、というかその段階ではもはや思考として加工済みのものを表現する。そのため例えば学生に「今どんな気持ちか」と尋ねると、人見知りかどうかに関わらず自分の思考について話すか、自分の気持ちではなく相手の気持ちについて語ることが多い。

また、日本人は相手が何か主張したらその言葉をわりと真摯に受け取るが、アメリカ人はそれを受け取るかどうかも自己選択である。これは極端かもしれないが、アメリカに長く住んでいる方の意見で印象的だったのは「日本人はファックユーと言われたら、何故だろう、自分のどこがそうなのだろうと考える。けれどアメリカ人はファックユーと言われたらまずはファックユーと返す」という話だ。日本人の場合、相手の意図や気持ちが考慮された上での自己主張や会話があるので、軸は相手にあり、他者優位というか全員キャッチャーのような会話になる。しかしアメリカ人は自分が軸で他者はあくまでも他者なので、全員ピッチャーというか、たとえキャッチャーがいなくてもとにかく投球するというような会話となる。

このように、日本人は和を保つために少ない会話で、あるいは一歩引く形でコミュニケーションを円滑にしてきたが、アメリカ人は自分を前に出し会話を増やすことでコミュニケーションを円滑にしてきた。国際社会では、日本人は確かに自己主張やコミュニケーション能力に欠けるのだが、能力がないわけではなくその仕方が違うのである。